

【熊本S. J. C. D. 例会 抄録】

演 題 正中矢状面を基準とした全顎的咬合再構成を行った症例

演者名 田中 俊憲

日 付 2010年5月25日

keywords

1. 正中矢状面
2. 咬合再構成

抄 録

目的：様々な過去の歯科治療の繰り返しによって結果的に不適合補綴物が多数装着され、不適切な咬合平面や咬合面形態が付与されている症例が数多く存在している。その原因として明確な基準に基づいた全顎的な診査診断が不十分であり、仮に診断できたとしてもそれを具現化することが困難であったことが考えられる。そこで今回正中矢状面を指標とした全顎的咬合再構成を行い、良好な結果が得られた症例を経験したので報告したいと思う。

方法：患者は68歳女性で初診は平成21年1月30日、主訴は義歯不適合および左顎関節雑音であった。全顎的に不適合補綴物および不適切な咬合平面が付与されていた。

そのため診査診断を行い、正中矢状面を基準とした咬合再構成を行う治療計画を立案した。

結果：正中矢状面という明確な基準に基づいたプロビジョナルにてステップごとに確認していき、初診から11カ月後に最終補綴物を装着した。現在、義歯の調子も良好であり、左顎関節症状も消失した。

考察：正中矢状面を基準とした咬合診断を行い、それに基づいた咬合再構成を行うことで患者の口腔環境の改善を図ることができた。また、患者自身の満足度も非常に高く、本システムの有用性を再認識した。